

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	羊飼：小品：文苑
Author(s)	あまの予
Citation	龍南會雜誌， 1 2 2： 2 5 - 2 7
Issue date	1907-10-31
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6052
Right	

文苑

羊飼

あまの予譯

わたしが山で羊の番をして居る時には、犬と羊と、其他には生物といふもの一つも見ないで、幾日もくも、獨りで暮らすのが例でした。時としては藥草採の仙人に逢つたり、炭焼の眞黒な顔を見ないでも無いか、是等の人々は閑居のために、沈黙に慣れて、殆んど物語の趣味を失つて居るのだから、麓の村々市々には、如何なる事があるも知ら無い。

山へは二週間目に一回、麓の主家から食料品を送つて呉れるのが例で、其時山路を登つて來る驢馬の鈴が聞こえて、小さい若者の活潑な顔や、或は年を取つた伯母さんの赤い帽子が目につく時、わたしは、殆んど飛び立つ程の嬉しさを感ずるのでした。其れからわたしは其若者や小母さんに迫つて、何處の小供が洗禮を受けたの、誰と誰とが結婚をするの、麓に起つた種々の出來事をば、殘る限なく物語つて貰ふ。寂びしく暮らす私の耳にはどういふ平凡な出來事でも、愉快に響かぬ事は無いのでした。が、奇麗な御主人の御嬢様、マア此界限十里四方で、並ぶ者無い御嬢様の事をば、とりわけ熱心に聞くのでした。それで私は其御嬢様が何處の祝に行かれたとか。何日の祭に來られるとか、大勢の村の男が絶えず周圍に集るとか、種々様々の物語を、殊更平氣の顔をして聞く。見

る影も無い羊飼のわたしが、何の生意氣かと、けあしてかゝる人もあらうが、わたしは今年十八の今日迄、彼れ程奇麗な御方を見た事が無い。どうして其れを思はずに居られまうよう。

或日曜日の事。此二週間目の食料が、遅くなる迄到着しない。番頭さんが忘れたのであらうと、わたしは獨言をいうて居たが、午頃非常な夕立がしたので、惡路のために驢馬が來られぬと思ひ返へす。すると午後の三時頃、雨を帶んだ四方の山々が、如何にも奇麗に輝いて來た時、木の葉を傳ふ雨の滴や、水嵩の増した谷川の音の中から、いつもの活潑な鈴の響が、復活祭の鐘の様に聞えて來る。併し其日の馬追は、いつもの若者でも無く、勿論老年の小母さんでは無い。それは思ひも寄らぬ主家の御嬢様で、柳の籠に腰をかけて、新鮮な山の空氣と、夕立に打たれた其御顔が、目覺むるはがりの美つくしい薔薇色、若者は病氣、小母さんは里へ歸へったので、代理の人の無かつたといふ事、(御嬢様は驢馬の脊から下りて來られて)路を迷つてツイ時に後れた事迄、落ち無く御心切に話して下さる。ほんに思へば美つくしい御伎倆わたしはいつ迄見ても、見厭きる事が無かつたのです。實をいふと、私は是迄斯様に近く御嬢様を見た事が無い。冬になつて、羊が村に歸へつた後、夕方御主人方の食卓に就く時、御嬢様は活潑に食堂の中を御歩きにあるが、併し雇人あごには一言の挨拶も無く、いくらか權高に通つて行かれる。今其珍らしい御方が只一人かたしの前に立つて居るのだ。どうして茫然とせずに居られまうよう。

御嬢様は食料を馬から下ろして、不思議の様子で周圍を見まわし、日曜の晴着に泥の付かぬ様、注意して、裾を上げながら、小舎の内部が見たいと仰有る。羊皮をかけた藁布團、帽子の附いた大

外套や、小銃あどに至る迄も、皆悉く珍らしい御様子。

「併し汝は能く斯ういふ所に住んで御出でだね。寂びしか無いの、尤で獨りぼつちでさ。」と御嬢様は斯う仰有りながら。「寂びしい時にはどういふ事を考へて居るの。」

其時わたしは、御嬢様あなたの事をと云ひたいのでした。實際わたしは實がいひたかつたのです。併し其時私のあわて様は全く非常なもので、只の一言も口から出て來ぬ。其れを見られた御嬢様は、咄つて遣らうと思はれたのであらう。最早御歸りの御支度にかゝりながら。

「當てゝ見様か、汝の愛人の事。屹度さうだらう」。

「併し斯ういふ山の上迄昇つて來るかい。」と斯ういひながら、嫣然と微笑せられた其御容貌。天女といふのは是れかと思ふばかりでした。

それから空籠を馬の背に乗せて、元來た路を御歸へりにある。險岨な坂道に御姿は消れても、小石を踏み蹂る驢馬の音が、一つ一つ胸の奥迄響く様に思はれて、何とは無ゝに慕はしいひびきが、長い 長い間わたしの耳に残つて居るのでした。

我がうへに露ぞれくなる天の川

と渡る舟の櫂のしづくか

よみ人知らず